山本　祐司著
毎日新聞社会部
有須　和也著
黒田清　記者魂は死なず
青木塾／天野　勝文／山本　泰夫編
ジャーナリズムの情理
新聞人・青木彰の遺産

多メディア時代のなかで

ジャーナリズムについて考えるための良書

鈴木　雄雅

このところ「事件記者」という言葉を聞かなくなったような気がする。同じように「ブンヤ」ももはや死語になったか。いやそうでもあるまいと言いたいのだが……。戦後、一九七〇年代までの高度経済成長に合わせるかのように、事件記者は社会の悪を暴く「月光仮面」の具象化であり、社会正義を追求するシンボルであった。

思えば、NHKが制作した「事件記者」（一九五八～六八）は最高視聴率四〇％以上、警視庁記者クラブを舞台に、新聞記者たちのスクープ合戦を描いた社会派ドラマとして一時代を築いた。この事件記者というのは業界用語に近いもので、原作者の造語とも言われているが、ドラマの主人公が「社会部記者」であることに違いはない。

それから約三〇年以上経ち、いくつものスクープが社会部から生まれた。それらの中心にいた山本祐司（元毎日新聞東京本社社会部長）が『毎日新聞社会部』の栄光と悲劇の奇跡を描き、大阪読売で「黒田軍団」を率いた社会部長、黒田清（一九三一～二〇〇〇）の伝記『黒田清　記者魂は死なず』（有須和也）が出版された。そして産経新聞の編集局長から筑波大学教授に転身したのちも、日本のジャーナリズムの今日的状況と行く末に多くの懐疑を投げかけた青木彰（一九二五～二〇〇三）を敬愛してやまない二〇名近くが執筆した『ジャーナリズムの情理　新聞人・青木彰の遺産』。この三冊が、ジャーナリズムとは何かを考えるには、いま良書である。

いずれも前述した社会部が新聞社の花形であり、各社は速報、企画でしのぎをけずり、優秀な人材を輩出した時代が共通の背景としてある。「報道とは伝えることやない。訴えることや！」という黒田の叫びが社会部の存在を象徴的に表していると言っても、過言ではあるまい。無論そこには後世に残るスクープばかりでなく、失敗や挫折、「喜び」や「悲しみ」、「怒り」や「笑い」、「希望」も語られている（山本）。それは青木が説く「情理（情と理）」の世界という言葉に集約されるのかも知れない。

――――――

ところが、それがいつからか、事件報道と人権をめぐる問題や、パック・ジャーナリズムの行き過ぎがメディア・スクラムに言い換えられるようになった。テレビとの速報戦に新聞が抜かれ始め、社会部に替わって政治部や経済部が社の主流派となる流れと同じところも時代の趨勢なのだろうか。何か歯車が狂ってきた。二〇〇〇年以降、いわゆる「外務省機密漏えい事件」をめぐる真相の事実が分かり、当事者の口から生々しい証言が出てくるにしても、「国家（権力）が民を殺しても守るものは何か」を考えるには、流れる歳月がまだ足りないとでもいうのか。「ロッキード事件」でのマス・メディアの活躍は否定しないが、本当に自想の本質は暴けたのだろうか。

そうした高次元の社会問題はそれ自体スクープの価値はあるにしても、「怒るべき低次元」での決着となってしまう（司馬遼太郎、山本）。社会、世論の動向に、マス・メディアの中心であるべき新聞のジャーナリズム機能について、現代社会は再考すべき課題を多く抱えている。

なぜならば、その最たるものである社会部記者が果たしてきた多くの功績が過去になりつつあるからだろう。毎日新聞社会部が、黒田が、そして青木が活躍した時代は新聞というマス・メディアがまだ公器であり、弱者に代わり、社会の底辺でうごめく「悪」を露出させ、それらを打ち砕くだけのエネルギーを十分に持っていた。

しかしながら、技術革新を頂と仰ぐ現代社会の急速な変化は麓に住む人間ばかりか、マンネリズムの一語に集約させるのはやや乱暴としても、マス（大衆）という語が使われなくなってきた。そのこと自体、（マス・）メディア自身を弱体化させてきたことは間違いない。多メディア時代の登場によるジャーナリズム機能の低下は相対的な力の衰退とも言われるが、実は内部に抱えた要因が少なくともそれらを後押ししていることを、この三書から読み取ることができよう。

その金属疲労とも言うべき現象が新聞組織を蝕み、たとえ病み始めていることに気づきながらも、治療のための処方箋を描こうとしたものは、当然のように現場で疎まれたのもまた事実であろう。組織が硬直化すればするほど、薬は効かなくなる。一時代を築いた読売大阪（社会部）が終焉を迎えるのは、皮肉にも昭和の終わりと時を同じくした（有須）。

青木は言う。「どんな時代でも、新聞記者の仕事は〝人間発見の旅〟であり、人々の喜び、悲しみ、苦しみを通して、生きる尊さを学べると考えている。その生きる尊さを守ることが〝草書〟体の新聞の責任だと思っている」

青木が描こうとした処方箋は、新聞そのものであろうが、実は取材対象となる人々の、変化しつつある時代への対応に警告を放っているように思えてならない。それは新聞メディアの社会部記者という組織や単位でなく、テレビやインターネット上でジャーナリズム活動、情報発信作業に従事しているものたちが常に意識しなければならないことを示唆している。

最後に、毎日の経営危機について山本が内部からのスタンスで執筆している箇所（第十二章）は貴重な証言である。（すずき・ゆうが氏＝上智大学教授・新聞学専攻）

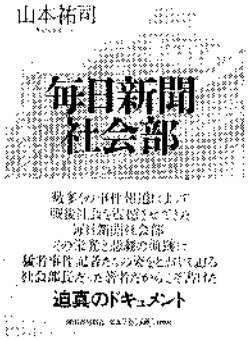
★やまもと・ゆうじ氏は毎日新聞司法記者を経て、社会部部長などを歴任。著書に「最高裁物語」など。一九三六（昭和11）年生。

★ありす・かずや氏は『PLAY』編集長を経て編集委員。同志社大学卒。一九五六（昭和31）年生。

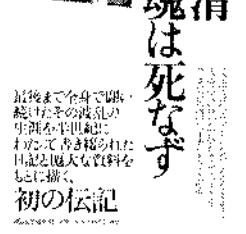
★あまの・かつふみ氏は毎日新聞編集委員・論説委員などを歴任。共編著に「新　現場からみた新聞学」など。一九三四（昭和9）年生。

★やまもと・やすお氏は産経新聞出版社長。産経新聞整理部長・編集局次長などを歴任。一九四六（昭和21）年生。

46判・472頁・1680円
産経新聞出版
4-902970-24-4



46判・359頁・1995円
河出書房新社
4-309-24372-X



46判・349頁・1995円
河出書房新社
4-309-24361-4